第３章　考　　察

本町西Ｃ遺跡は，本編第１・２章で述べたように中位の第Ⅲ段丘に相当する丘陵平坦面上に，縄文時代前期初頭の集落が展開しており，同時期の土器が出土土器総数において高い比率を占めている。他時期の遺構は，平安時代の住居跡１軒と時期不明の土坑数基であり，他時期の遺物も，縄文時代後・晩期の土器と平安時代の土師器・須恵器を合わせても１割程度である。

それで本章においては，本町西Ｃ遺跡の主体となる縄文時代前期初頭の花積下層式の土器について取りあげてまとめてみたい。

第１節　土器について

縄文時代前期初頭に位置付けられる花積下層式の福島県内における細分編年は，飯館村羽白Ｄ遺跡の調査で５細分（鈴鹿1987・1988），小野町小滝遺跡の調査で３細分（松本1993），相馬市山田Ｂ遺跡の調査で，羽白Ｄ遺跡での５細分に後続する段階（吉田1997）が設定されている。これらに従えば最大６細分されることになるため，本遺跡出土土器の特徴と傾向を確認して花積下層式のどの段階に比定されるかを検討する。そして県内の類例に当たり，比較検討を行いながら前後段階との連続性や分離要素についてまとめる。

１．本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器の様相（図31）

Ⅰ群土器は１～４類に分類したが，基本的には口縁部文様帯を持つ１類と，地文を全面に施し部分的に加飾する２類に分かれ，それらの部分資料である３類胴部破片と，４類底部資料として報文中扱ってきた。ここでは１類と２類の特徴を抽出し，補足的に３・４類について言及する。

１類　器形の全体像をうかがえる資料はないが，胴部上半部が分かる資料をもとにすると，口縁部形態で，内湾型，内傾型，直線的な外傾型の３種に大まかに分けられる。そのうち内湾型が比較的多く，胴部はいずれも非結束羽状縄文が施される。内面調整はミガキが多く，ナデのものもある。

（内湾型）内湾型には，緩く内湾するものと強く内湾するもの両者を含めた。隆帯や刺突列で口縁部文様帯を上下に２分するタイプと，２分しないタイプがある。２分するタイプの上部文様帯には，口縁部に平行する２条一組の縄圧痕文を施す１～４・８や，鋸歯状構成の集合単沈線文を施す５が見られる。下部文様帯には２・３条一組の縄圧痕文による渦巻きと，それを基点に横位に連結する菱形や三角形のモチーフを描き，モチーフ外や組になる縄圧痕文外に集合単沈線文が充填される。この傾向は概ねどの土器にも当てはまる。ただ５は，上部文様帯から垂下する隆帯に沿って縦位のモチーフが描かれ，異彩を放っている。口縁部文様帯を２分しない６・７も，基本的に２分す

るタイプの下部文様帯と同様な文様構成を持つと考えられる。

（内傾型）いずれも屈曲部に隆帯や刺突列を持ち，口縁部文様帯を２分する。上部文様帯は，口縁部に平行する３条一組の縄圧痕文を施す10・11や，縦区画で折り返して楕円状を呈する縄圧痕文を施す９がある。下部文様帯は，上述の内湾型の下部文様帯と大差ない文様構成をとると考えられるが，３条一組の縄圧痕文が多いのは内傾型の特徴かもしれない。

（直線的外傾型）口縁がやや外反するものも含めた。隆帯や刺突列で口縁部文様帯を２分する12・13や，区画要素のない14がある。上部文様帯のあるものは，口縁に平行して横走する縄圧痕文が主に施される。14の口縁直下の縄圧痕文は口縁に平行するので，区画要素のない上部文様帯と判断した。下部文様帯は，内湾型・内傾型同様の文様構成と同様に２条一組の縄圧痕文で，渦巻きと，それを基点に横位に連結する菱形・三角形のモチーフを持つ。

以上口縁部形態で分類して，それぞれ特徴を模式的に列記した。次にこの分類に当てはめられなかった資料で特徴あるものについて見ていく。15～17は胎土・文様構成・内面調整から同一個体と判断した資料で，３条一組の縄圧痕文を施すが，それが棒状工具でなぞられて沈線になっている。これは５と23にも見られる。18には鋸歯状構成の集合短沈線文が見られる。これは５にも見られるがこの２つ以外には出土していない。どちらも上部文様帯に施されているので，上部文様帯特有の文様要素と考えられる。５・19には円形の隆帯が見られる。21～25には口縁部文様帯下端区画が分かる資料を集めた。区画要素のあるものは，22の刺突列，23の２条の沈線内に刺突文を充填するもの，24の１条から数条の縄圧痕文を巡らすもの，25の末端結束の撚糸を横位に連続押捺するものがある。区画要素の無いものは，21のように斜走する縄圧痕文がそのまま体部地文部に接する。

２類　器形は大多数が外傾して立ち上がって，口縁部が外反するものや微妙に内湾するものがある。１点のみ内傾するものが認められるので，１類の器形は概ね２類にも認められる。文様は基本的に地文のみで，たまに部分的に加飾するものがある。地文は全て非結束羽状縄文であるが，菱形構成になる資料は１点も無い。内面はごく稀にミガキが施されるが，ナデのみの調整が主流である。

部分的に加飾するものには，26の口端部に刺突列を施すもの，27の口縁部に疎らに縄文を転がした隆帯を１巡させるもの，28のように特別な文様要素を持たないが，口端部の縄文のみ施文幅を狭くして特殊化するものがある。加飾しないものは全面非結束羽状縄文であるが，31のように口唇部にも縄文を施すものがある。

３類　胴部地文のみの資料で，内面にミガキを施すものは１類に属す可能性が高い。それ以外は分類不能である。全て非結束羽状縄文のみが施される。

４類　底部資料で平底が多く，少数丸底をつぶして平底状にしているものがある。底部外面には，35・39のように中心から同心円状に羽状縄文を施すもの，36のように中心に円形の側面圧痕文を施文して，周囲に斜縄文を施すもの，37のように不規則に斜縄文を施すもの，38のように胴部地文部の延長で非結束羽状縄文が施されるものがある。

以上，各類の特徴を列記した。以下にそれらの要点を整理する。

図31　本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器集成

①　１類は口縁部形態で，内湾型，内傾型，直線的外傾型に分かれ，内湾型が最も多い。

②　１類の口縁部文様帯は上下に２分されるものが多く，上部文様帯には横走する縄圧痕文か鋸歯状構成の集合短沈線文が施され，下部文様帯はいずれも同様な文様構成になる。

③　主文様要素の縄圧痕文は，２条もしくは３条一組が基本で，基本的に１種類の原体を使用する。

④　内傾型は，必ず口縁部文様帯が上下に２分される。

⑤　縄圧痕文を施文後に沈線に引き直すものや，縄圧痕文にＬとＲ両方用いるものが少数ある。

⑥　口縁部文様帯の下端区画に，区画要素を持つものと持たないものがある。

⑦　２類は，加飾するものより加飾しないものの量が多い。

⑧　底部は基本的に平底で，丸底がつぶれて平底状になるものが少量ある。

文様要素や文様構成に画一性が高いこと，住居から共伴して出土していることなどより，１類土器はあまり時間差の無い土器群と考えられる。２類土器も１・２・３・９号住居跡で１類土器と共伴しているので同時期と考えられる。３・４類もこれらに付随するため同時期であり，３種の口縁部形態や口縁部文様帯の区画要素については，この土器群内のバリエーションと考えられる。

２．福島県内出土の本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器の類例（図32）

福島県内の諸遺跡から出土している花積下層式期の資料で，本町西Ｃ遺跡出土資料と同様な文様構成や文様要素を持つ土器を抽出し，傾向や類似点・相違点のあり方を探ってみたい。地域は便宜的に本町西Ｃ遺跡の所在する浜通りから，中通り，会津地方と分けて話を進める。また本町西Ｃ遺跡での分類基準を適用して，１類を内湾型，内傾型，直線的外傾型，口縁部文様帯破片と２類・４類に分けて見ていく。

浜通り　同様な資料は，飯館村羽白Ｄ遺跡，浪江町中平遺跡，富岡町本町西Ａ遺跡，いわき市上ノ台Ａ遺跡・中倉Ｂ遺跡・差塩Ｄ遺跡から出土している。１類で多く見られるのは内傾型の資料で，次が内湾型，直線的外傾型は非常に少ない。内傾型の資料は全て口縁部文様帯を上下に２分しており，内湾型も上下に２分するものが多い。直線的外傾型は資料が少なく小片であるので不明である。上部文様帯は７～11が鋸歯状構成の集合短沈線文，１は隆帯文と縄圧痕文，２・３・６は口縁に平行する縄圧痕文，12は蕨手状の縄圧痕文，13は対向する斜位の集合短沈線文が見られる。６・８・９は口端にスリットを施す。下部文様帯は１のように隆帯を用いるものもあるが，15・16のように縄圧痕文による渦巻きと斜走・横走するモチーフと充填される集合短沈線文が施される。17は口縁部文様帯下端区画に刺突列を用いている。２類は加飾する資料が豊富で20・21は刻みを持つ隆帯，23が段差のある隆帯，19は口端に狭い縄文施文帯がある。24は口唇部に縄文を転がす。

中通り　同様な資料は，福島市愛宕原遺跡・宮畑遺跡・獅子内遺跡，郡山市中ノ沢Ａ遺跡，天栄村山崎遺跡，芹沢Ａ遺跡，玉川村諏訪平Ｂ遺跡，小野町小滝遺跡，白河市鶴子山Ｂ・Ｃ遺跡から出土している。１類は内湾型が多く，内傾型・直線的外傾型は資料が少ない。内湾型・内傾型で判明しているものは，ほぼ口縁部文様帯が上下に２分されている。直線的外傾型は区分するものとしな

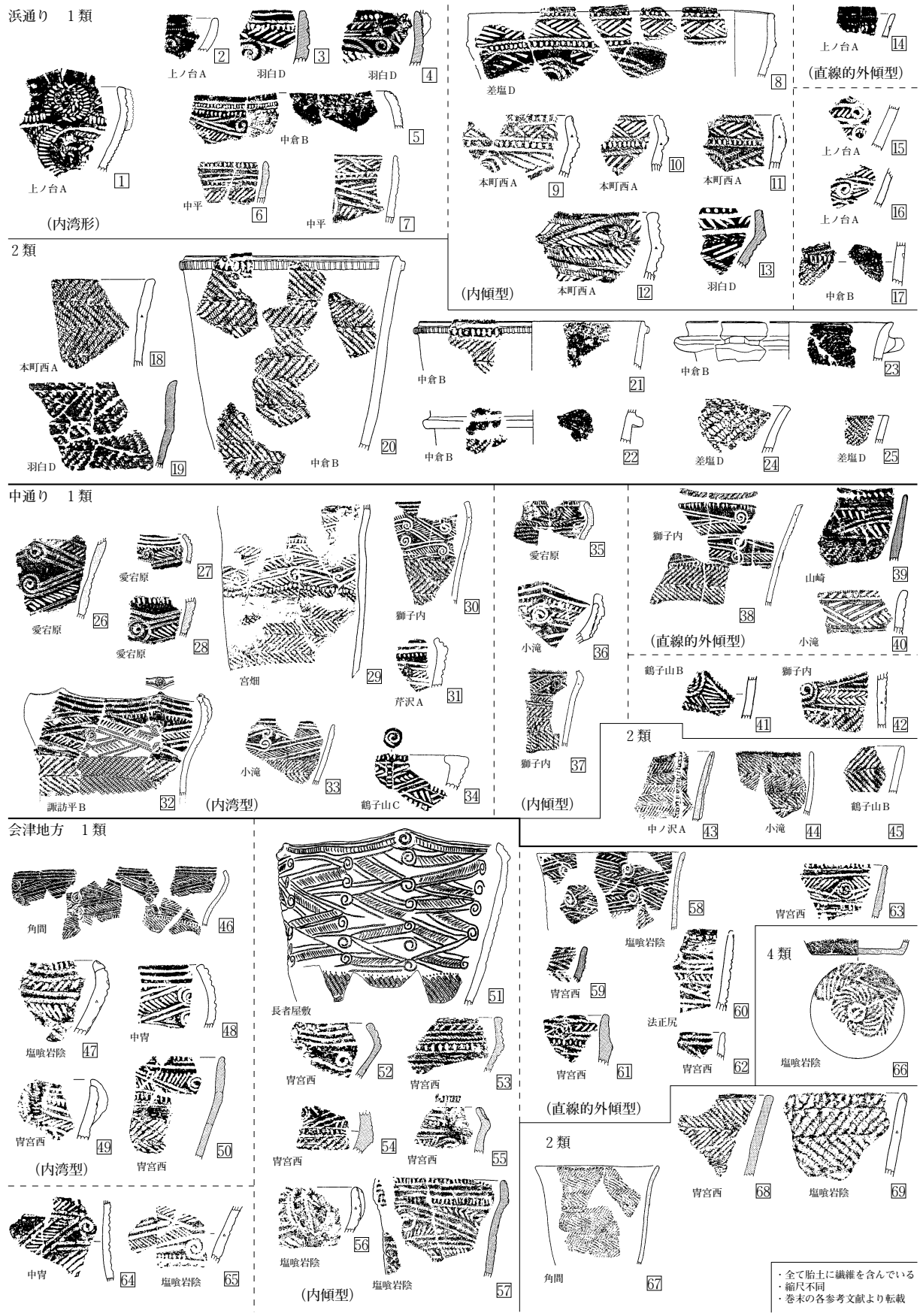

図32　県内出土の本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器の類例

いものがある。上部文様帯は，27・30・31・32・33・39が口縁に平行して２～３条一組の縄圧痕文，35が蕨手状の縄圧痕文と集合短沈線文，36が縄圧痕文による渦巻きとそれを基点に横走するモチーフ，その内部に集合短沈線文，40が鋸歯状構成の集合短沈線文が見られる。34・35・38・39・40は口端部にスリットを施す。下部文様帯は縄圧痕文による渦巻きと，それを基点に斜走・横走させて菱形・三角形のモチーフを描き，集合短沈線文を充填するが，35のように５条の縄圧痕文のみを施すものもある。集合短沈線文には，42のように「ハ」字状になるものがある。２類の加飾するものには43のように，波頂部から縦位の隆帯を垂下させるものがある。

会津地方　同様な資料は磐梯町法正尻遺跡・角間遺跡，山都町長者屋敷遺跡，会津高田町中胄遺跡・胄宮西遺跡，西会津町塩喰岩陰遺跡から出土している。１類は内傾型・内湾型・直線的外傾型の３種が同率で見られる。内傾型は口縁部文様帯が全て上下に２分され，内湾型もだいたい上下に２分される。直線的外傾型は２分するものとしないものが半々である。上部文様帯は46～48・50・52・57・62・63が２～３条一組の口縁に平行した縄圧痕文，49・51・53は平行する縄圧痕文間に刺突を充填し，60は縄圧痕文による渦巻きとそれを基点に横走するモチーフが見られる。47・50・57・63は口端部にスリットを施す。下部文様帯は縄圧痕文による渦巻きとそれを基点に斜走・横走させて菱形・三角形のモチーフを描くものが大半を占めるが，53のように横走する縄圧痕文のみのものもある。53はやや新しい時期の可能性がある。２類の加飾するものには，65・66のように口端に刺突列を施すものがある。64は４類で同心円状に非結束羽状縄文が施される。

以上，県内３地方の類例を概観した。以下に判明したことを列記する。

① 口縁部上部文様帯には，口縁平行の縄圧痕文，鋸歯状構成の集合短沈線文，縄圧痕文と短沈線文の組み合わせが見られるが，鋸歯状構成の短沈線文は県南地方に多く，会津は不明である。

② ３地方とも口縁部下部文様帯の文様構成は，縄圧痕文による渦巻きとそれを基点にする菱形・三角形モチーフと，その空白部に充填する集合短沈線文が基本で，稀に横走する多条の縄圧痕文のみが施されるものがある。

③ １類胴部地文の非結束羽状縄文で菱形構成になる資料は無く，おそらく２類も同様である。

④ 縄圧痕文に使用される原体は，１段撚りで，単種である。ＬとＲ両方を用いるものは無い。

⑤ １類土器で，口端にスリットを施すものがある。これは本町西Ｃ遺跡では少ない。

３．本町西Ｃ遺跡Ｉ群土器の編年的位置付け

福島県内における花積下層式は，先述のとおり羽白Ｄ遺跡１次調査で４細分（鈴鹿1987），羽白Ｄ遺跡２次調査でⅡ群０類を加えて５細分（鈴鹿1988），小滝遺跡で３細分（松本1993），山田Ｂ遺跡の調査で羽白Ｄ遺跡の５細分に後続する１段階が設定された（吉田1997）。小滝遺跡の３細分は，それぞれ花積下層式（古）→羽白Ｄ遺跡Ⅱ群０類相当，花積下層式（中）→羽白Ｄ遺跡ＳＩ10出土土器相当，花積下層式（新）→羽白Ｄ遺跡ＳＫ26出土土器相当としている。そのため現在の花積下層式細分案は，羽白Ｄ遺跡の調査成果と山田Ｂ遺跡の調査成果を合わせた６細分が認知されていると

判断できる。それでここでは，この６細分を概観して本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器の帰属を考える。

（羽白Ｄ遺跡と山田Ｂ遺跡の調査成果による花積下層式の６細分）

ⅰ）　羽白Ｄ遺跡Ⅱ群０類段階・小滝遺跡（古）段階

器形は深鉢で器壁は厚く，口縁部の多くは外反して口唇部が平らなものや先細りするものが見られる。断面三角形や台形の隆帯が口唇部直下や頚部につくものが少なからずある。文様は１段もしくは２段原体の縄圧痕文で，直線的図形や渦巻きを描く。１段撚りではＬとＲを束ねて矢羽状の文様効果をだすものがある。他の文様要素として，ヘラ状工具・半截竹管・円形竹管による刺突，刺突・縄文・縄圧痕文などを施す隆帯がある。地文には単節縄文や撚糸文を用いて，整った羽状，不整な羽状，菱形状，縦走の施文がなされる。口唇部上面や内面にも縄文を施すものがある。内面はナデのみのものが多いが，条痕が施されるものもある。

ⅱ）　羽白Ｄ遺跡ＳＩ５・19段階

器形は深鉢で，口縁部は直線的に外傾するか緩やかに内湾するものが多い。底部は丸底や尖底のものが多い。口縁部文様帯は狭く，上下を列状の側面圧痕文で区画する。口縁部文様帯には１条の縄圧痕文で円形に近い渦巻きを施し，そこを基点に１～３条の横走・斜走する縄圧痕文で図形を描く。図形同士の隙間に，短い縄圧痕文を集合単沈線文状に充填する。文様要素はほとんど縄圧痕文のみである。地文は単節縄文で整った羽状縄文が施される。地文型の資料には，口端に刺突列や列状の縄圧痕文で加飾するものが見られる。

ⅲ）　羽白Ｄ遺跡ＳＩ10段階・小滝遺跡（中）段階

全体的な器形は分からないが，口縁部は緩やかに内湾する。口縁部文様帯は円形竹管を用いた斜角刺突列で上下に２分するものがあり，上部文様帯には口縁に沿った２条一組の縄圧痕文が施される。下部文様帯には横走・斜走する縄圧痕文で図形を描く。渦巻きの縄圧痕文も見られる。縄圧痕文間には集合単沈線文が充填される。地文型の資料には２条の横走する縄圧痕文や，幅の狭い縄文で加飾するものが認められる。

ⅳ）　羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階

器形は深鉢で，複合口縁で「く」の字状に内湾する口縁や山形口縁のものがある。底部は平底となる。口縁部文様帯を隆帯で上下に２分して，上部には鋸歯状の集合単沈線文が，下部には縄圧痕文による蕨状文を横位に連結させ，他に縄圧痕文を斜走させて菱形図形を描き，その内部に菱形各片に直行するような集合単沈線文を充填するものや，ＲとＬ撚り２種の原体を一組として矢羽状の縄圧痕文を施したものがある。「Ｃ」字型の刺突文を施すものもある。また，渦巻き以外の曲線図形を描く類もこの段階に含まれる可能性が高い。地文型に加飾するものは見られない。

ⅴ）　羽白Ｄ遺跡ＳＫ26段階・小滝遺跡（新）段階・山田Ｂ遺跡Ⅱ－１ａ類土器段階

器形は深鉢で，口縁部が直線的に外傾するものや外反するものが多く，内湾するものも少数見られる。縄圧痕文で大きな渦巻きや数条一組で横走・斜走または曲線図形を描く。縄圧痕文の余白部には不規則な刺突文を充填している。口縁部文様帯の上端と下端に刺突列で区画を施している。ま

た，縄圧痕文の余白部に円形刺突文を充填するのもこの段階に含まれる可能性が高い。

vi）　山田Ｂ遺跡Ⅱ－１ｂ・１ｃ・１ｄ類土器段階

全体の器形は不明だが，口縁部は明確に内湾するものが無く基本的に外反する。器壁が薄く，口唇部を内削ぎにするものが多く見られる。文様帯は口縁部に限定されるものと，上胴部に及ぶものがあり，後者は文様帯中位に区画が施され２段になる。区画は隆帯状の高まりに刺突を加えるものが見られる。文様は円形竹管文を支点にし，２条から３条一組の縄圧痕文で蕨状文を描画して，その周囲に，「ハ」の字状の集合短沈線文や円形竹管刺突を充填するもの，半截竹管で菱形文やヘアピン状の沈線文に縄圧痕文を施すものがある。縄圧痕文は全てＲとＬを２条合わせて矢羽状の効果を出している。地文は非結束羽状縄文，結束第１種羽状縄文，斜縄文がある。地文型の資料には，口唇部直下に２条一組の縄圧痕文を施し，地文がループ文になるものがある。

以上の６段階の中で本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器に内容的に最も近いのは，羽白Ｄ遺跡ＳＩ10段階・小滝遺跡（中）段階である。また内傾する口縁部を持ち，上部文様帯に鋸歯状構成の集合短沈線文を施す点で羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階にも類似点が認められる。羽白Ｄ遺跡ＳＩ10段階に見られる特徴は本町西ＣⅠ群１類の内湾型に類似している。しかしＳＩ10で共伴した土器の中には，区画に列状の側面圧痕文を施すもの，平行して横走する数条の縄圧痕文間に刺突を沿わせるもの，地文型に菱形構成の縄文を施すものがあり，また底部が尖底・丸底が主体になるなど相違点が多い。一方小滝遺跡（中）段階は，縄圧痕文・集合短沈線文・刺突文で文様を描くもので，口縁部形態に内湾型・内傾型・直線的外傾型の３種が見られる。この土器群と本町西Ｃ遺跡Ⅰ群１類との共通性は極めて高く同時期と考えられる。羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階の鋸歯状構成の集合短沈線文を施す資料は，上部文様帯は類似するが，下部文様帯が３条一組の縄圧痕文で幾何学的な菱形を描き，縄圧痕文の連結部がややカーブし，菱形内部の各辺に直行するように集合短沈線文を充填しており，本町西Ｃ遺跡Ⅰ群段階の資料とは文様の割付が違う。そのため，羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階との共通性は弱いといえる。

ここで問題となるのは，羽白Ｄ遺跡ＳＩ10段階と小滝遺跡・本町西Ｃ遺跡該期土器の関係である。羽白Ｄ遺跡考察中で鈴鹿はＳＩ５・19段階のグループを県内北部に分布する類として，同時期県南部には，日向前Ｂ式系統後半の柳橋Ａや泉川の新しい時期のものが分布すると考えられると言及し，ＳＩ10段階はこれら２系統の土器が融合して，同一土器内に同居した資料であると考えている。事実，ＳＩ５・19グループは資料が増加した現段階においても，天栄村萱立遺跡を南限に，郡山市近辺までが主な分布域である。これに対し，同時期県南部に分布する柳橋Ａ・泉川系統の資料はそれほど増加しておらず，この段階についての県内南北２系統土器の比較は困難である。ただ，柳橋Ａ・泉川系統に見られる特徴は，日向前Ｂ式まで連続性の辿れる鋸歯文帯であり，この鋸歯文帯は先述のように本町西Ｃ遺跡や同時期の県内の類例にも見られる。確認できた範囲では，浜通りは差塩Ｄ遺跡・本町西Ａ遺跡・中平遺跡，中通りは小野町小滝遺跡である。いずれも上部文様帯に集合短沈線文が施されるもので，鋸歯文帯の系統として認定しうる。これらの分布をみると県中部を北限として，南部の阿武隈高地を主体としている。このことから前段階からの鋸歯文帯系統の分布の地域

性は引き続いていると考えられる。羽白Ｄ遺跡における本町西Ｃ遺跡Ⅰ群類例資料に見られる縄圧痕文間に充填される集合短沈線文は，前段階の短い縄圧痕文が集合短沈線の手法に置き換わるのではないかと考えられ，その点で異系統土器の融合と言えるのではなかろうか。

本町西Ｃ遺跡Ⅰ群土器内で特殊な要素を持つ土器として，縄圧痕文を沈線で引き直すものや，同一土器内にＬとＲの２種原体を用いるものが認められた。ＬとＲの２種原体を用いるのは次段階とされる羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階から確認できる要素なので，31図８・20は比較的新しい要素を含んだ土器と判断できる。縄圧痕文を沈線に引き直す手法は，モチーフを描く主文様要素が徐々に沈線に変化していく過程を想起させる要素である。その観点で類例を探すと，最も類似する資料は小滝遺跡の花積下層式（新）段階に属する小滝遺跡（17図18）や（37図26）が該当する。これらと31図15～17の土器の下部文様帯を比較すると，斜走する区画沈線とそれと直行するように充填される集合短沈線文の長短の関係が薄れていく過程を示し，前後関係にあると考えられる。ただ小滝遺跡の土器は，羽白Ｄ遺跡ＳＫ26段階相当という位置付けがなされており，直接つなげて考えるには羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階と羽白Ｄ遺跡ＳＫ26段階の前後関係を，比較検討しなくてはならなくなるが，本町西Ｃ遺跡出土資料にはこの段階の資料がないので，今回は各土器に前後のつながりを示す関係があるのを指摘するにとどめる。

４．ま　と　め

本町西Ｃ遺跡出土の花積下層式についてだいぶ長く書いたが，大半はどのように細分されているか，本町西Ｃ遺跡と同様な資料はどこからどんな土器が出土しているかという，福島県内における花積下層式の様相のおさらいに終始した感がある。その中でも指摘しえたこととして，本町西Ｃ遺跡の土器群は羽白Ｄ遺跡ＳＩ10段階・小滝遺跡花積下層式（中）段階とほぼ同時期の資料であること，同時期の鋸歯文帯系統の土器が福島県南部地域に主体的な分布範囲を持つ土器群であること，そしてこの段階の土器には，口縁部形態に内湾型・内傾型・直線的外傾型があり，大部分の土器が口縁部文様帯を上下に２分することなどが挙げられる。

県内の北部と南部に別傾向の土器が分布しているという話をするのであれば，本来隣接県の資料にも目を通すのが好ましいが，時間と紙数の都合上割愛してしまった。また上述したように，羽白Ｄ遺跡ＳＩ１段階以降のことについてはわずかに言及したにとどまり，本遺跡の土器群がどう変遷して後段階の土器に脈絡が辿れるかなどについても舌足らずで終わってしまった。これらについては，いずれ機会を改めて論を深めてみたい課題である。　　（新　海）

参　考　文　献

「愛宕原遺跡」1989　丸山　泰徳『昭和63年度市道原宿愛宕原１号線建設工事関連遺跡調査報告　愛宕原遺跡』
福島市教育委員会・(財)福島市振興公社
「上ノ台Ａ遺跡」1987　和深　俊夫他『常磐自動車道いわき市内埋蔵文化財調査報告Ⅱ　上ノ台Ａ』
いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・日本道路公団

「角間遺跡」1990　山岸　英夫『東北横断自動車道遺跡調査報告８』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
「宵宮西遺跡」1984　目黒　吉明他『宵宮西遺跡』会津高田町教育委員会・(財)福島県文化センター
「宵宮西遺跡」1990　芳賀　英一他『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「萱立遺跡」1986　阿部　俊夫『矢吹地区遺跡分布調査報告Ⅵ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「小滝遺跡」1993　松本　茂『東北横断自動車道遺跡調査報告21』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
「差塩Ｄ遺跡」1995　猪狩　忠雄他『東北横断自動車道遺跡調査報告30　東北横断自動車道関連Ⅱ』
いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・日本道路公団
「塩喰岩陰遺跡」1994　芳賀　英一他『東北横断自動車道遺跡調査報告25』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
「獅子内遺跡（１～３次)」1996・1997・1998　鈴鹿　良一他『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所
「諏訪平Ｂ遺跡」1983　山内　幹夫『阿武隈地区遺跡分布調査報告(Ⅲ)』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「芹沢Ａ遺跡」1982　石本　弘『矢吹地区遺跡分布調査報告Ⅱ』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「長者屋敷遺跡」1983　芳賀　英一他『県道一ノ木・木曽線改良工事に伴う発掘調査　長者屋敷遺跡』
山都町教育委員会・(財)福島県文化センター
「鶴子山Ｂ・Ｃ遺跡」2001　白河市『白河市史　第４巻　資料編１自然・考古』白河市教育委員会
「中宵遺跡」1990　芳賀　英一他『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「中倉Ｂ遺跡」1995　猪狩　忠雄他『東北横断自動車道遺跡調査報告30　東北横断自動車道関連遺跡Ⅰ』
いわき市教育委員会・(財)いわき市教育文化事業団・日本道路公団
「中平遺跡」1989　山内　幹夫他『国営請戸川農業水利事業関連遺跡調査報告』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「中ノ沢Ａ遺跡」1989　本間　宏他『東北横断自動車道遺跡調査報告４』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
「羽白Ｃ遺跡（１・２次)」1988・1989　鈴鹿　良一他『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ・ⅩⅢ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「羽白Ｄ遺跡（１・２次)」1987・1988　鈴鹿　良一他『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ・Ⅺ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「法正尻遺跡」1991　松本　茂他『東北横断自動車道遺跡調査報告11』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・日本道路公団
「松ケ平Ａ遺跡（１・２次)」1983・1984　鈴鹿　良一他『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅳ・Ⅵ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「宮畑遺跡」1995　梅宮　薫『福島工業団地造成に伴う埋蔵文化財試堀調査報告　宮畑遺跡』
福島市教育委員会・(財)福島市振興公社・福島地方土地開発局
「本町西Ａ遺跡」2002　三浦　武司他『常磐自動車道遺跡調査報告32』
福島県教育委員会・(財)福島県文化振興事業団・日本道路公団
「山崎遺跡」1992　石本　弘他『矢吹地区遺跡発掘調査報告10』福島県教育委員会・(財)福島県文化センター
「山田Ｂ遺跡」1997　吉田　秀享他『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』
福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・地域振興整備公団